

究、もう一つは学際的な研究なのです。私の研究分野は行政学です。それで私を呼んで、森鷗外の『意地』という小説集を取り上げて、その『意地』の中で、日本の文学と関連させながら、日本人の倫理観や責任感といったところを明らかにしよう、また、文学に刺激を与えようと考えたわけです。この経験から、われわれも、もし「方法としての日本研究」の確立、東アジア日本学の形成を考えるならば、それなりの方法を確立することも重要ではないかと考えて、これを書いたわけです。

もちろんその前提としては、研究の主体の確定です。日本学者、われわれがいわゆる東アジア日本学の形成を追求する以上、やはりここに座っている、東アジアの日本研究者の責任は非常に大きいのではないかと感じるわけです。

■ 南基正 中国的な必要性から日本学が始まり、それを東アジア日本学に広げるという問題提起、そしてその研究の主体として、中国の現状と歴史を背負う主体としての研究者ではなく、新しい研究者層として、日本学者を提起されたというように聞きました。

研究者が国を一方で背負いながら、その結果として国を超えることが可能かというところは、先ほどの稲賀先生の問題提起ともつながる話だと思いますが、それぞれの地域において、違う歴史的な文脈で行われてきた日本研究を、現状としてどのようにまとめることができるか分かりませんが、どこをスタート地点にしてやっていけばいいかということ、もう一回提起したようなものだったと思います。

これについて、何か意見がありましたら、発言をお願いします。

稲賀先生に、先ほどの質問につながる発言をお願いしてよろしいですか。今の白先生の問題提起に関連してですが。

■ 稲賀繁美 一つは知識の共有ということですが、今朝の平野先生のお話につなげて言いますと、例えばアジア歴史資料センターで、複数の言語で発信するのは難しいという話がありました。私はその必要はないと思うのです。むしろ、そこにアクセスした各国の人たちが、自分の国の言葉も使って、更に、われわれ共通の学術用語である、例えば英語でも構いませんが、そういうもので、そこにいわばタグを付け、翻訳を付けていく、それを三ヶ国の中でやっていく。それに対して、隣の国の学者が「これはちょっと解釈が違うのではないの」と疑念があるなら、またそこにタグを付けていく。そういう形で、ある意味で渦巻きがだんだん広がっていくという具合にしていけばいいのではないかと。すごく楽天的かもしれませんが、そこでもうコントロールなどできなくなりますが、今のインターネットの環境でしたら、バーチャル上でタグを貼っていくことがうまく回ることもあります。

規則ということを行いました、これはそのタグを貼っていくところで変なことが起こらない、これは難しいところなのですがその程度の安全弁でいいだろうということです。制度設計などは後回しでよいので、もう走らせてしまった方が面白いのではないかと気がします。

そこで二つ目ですが、つまりそういうところに年配の者ができるだけ口を突っ

込まない(笑)。私のような老人はもう何も言わないようにする。ただし、老人は失敗した経験だけはたくさん持っています。だから、若い方たちが危ないところに行ってしまったら、致命傷になる前に、「ちょっとそこは危ないよ」と言ってあげるぐらいの程度が一番いいと思います。

ルールを誰がつくるかという話ですが、これも結局、つくれる人はいないと思います。韓国の初代文化大臣だった李御寧(イ・オリョン)先生は、韓国で人気がある人かどうかは分かりませんが、一つ面白いメタファーを言っています。ゲー・チョキ・パーというのは、韓国の方はご存じだと思います。ゲー・チョキ・パーというのは、二律背反ではなくて、結局どれも片一方には勝てるけれども、三者のもう一つには勝てない。日韓中はそういう関係ではないか。日本がゲーを出してけんかをすると、中国はパーでぱっとくるんでくれる。けれどもそこで、線の切り方が悪いよと、ちょん切ってくれるのが韓国だと。おのおの、そういう役割があるのだから、それはお互いに尊重していくのが一つのやり方ではないか。だから、ここには「総合」はあり得ないのだけれども、三つ巴で動いていく。それをうまく動かせる車輪、ハブとスポークを何とかつくってやってゆく、それがコンソーシアムとしてのあるべき形ではないか。

ただ、そのところで、ハブを日本が取るというのは、日本学については極めて危ないと思います。むしろ、ハブからはあえて日本を外してしまう。つまり、日本のことを学ぶのに、例えば歴史だったら、国史に頼っていると、アジアから見た日本の歴史は絶対に書けないのです。そうだとすると、かなりこれは「自虐的」な言い方になるかもしれませんが、そこからは日本の専門家は、むしろ排除してしまった方がいい。仮に日本人を入れるとすれば、今日の朴さんの話にありましたが、自分の中に「他者を抱えている」という自覚を持った人だけを選んできた方がいいでしょう。国史が絶対一番正しい、国文学が一番正しい、日本語の教師しかやったことありません、という方は、ちょっと困るというのが私の経験上の実感です。

日本語の教師だったら、外国にいらっしゃって、そこで、「あ、今まで自分が日本でやってきたことでは通用しないのだ」という自覚を持った方が必要です。そういう方にその経験を生かしていただく。そういう人たちが自主的に集ったコンソーシアムが、ある意味で理想的ではないか。

これはフランス的と言いますか、地中海的な発想ですが、それに則して言うと、あとのサステナビリティは考えなくても、まず一歩目を実行に移してやってみるといのも一つの手かと思います。

南基正

どうもありがとうございました。

先ほどの私の言葉で言うと、国を背負った研究と国を超えた研究、うまく言えば、国を背負いながら超えるというのが一番いいのですが、それはなかなか方法的に難しい問題です。韓国にあっても、例えば同じような目標の下で行われる研究や会議でも、国際会議として国を超えて英語で行うような会議と、自分の国の言葉で行う会議とは若干違うのです。それをどう調和させるかということが非常に難しいのです。

■ 稲賀繁美

国際日本文化研究センターを代表するものではありませんが、センターがこれまでどのような失敗をしてきたのかをお聞きいただき、参考にいただければと思います。

まず一つ言っておきたいのは、先ほど劉建輝さんからも話があったように、今や、(日本研究は)文部科学省から「今、日本研究をやっている人は世界中で何人いるのですか?今、この場で答えなさい。」「わからないとは何事ですか?」と怒られるわけです。しかしながら、国内学会で国史や国文学をやっている人には、日本研究をやっているという意識はないのです。あくまでも日本国内の伝統に従ってやっています。そして、実は朝鮮半島を支配していた時も、「満洲国」を作った時も、その拡大版をやっていたわけです。今日では、下手をすると日本で学ぶ留学生の方々もその縮小再生産のプロセスに組み込まれて、各国に散らばらさせることに加担してしまいます。はたしてこれを日本研究と呼んで良いのか、とんでもないことだと思います。

逆に、仮に「日本学」と名をつけるとすれば、正に留学生の方が、自分なりの見方で日本を研究して行く、こちらの方がむしろ「日本学」と言えるのかも知れません。今後どのように展開するかはわかりませんが、この場で日本研究や日本学を考える場合には、後者すなわち外の目から見て、日本あるいは日本がその一部となっているアジアとは何かという意識を持っている人たちの活動を日本学の場である、と呼んだ方がよいのではないのでしょうか。

また、南先生が指摘したとおり、人的なインフラはここにあるのです。それをどうやって使うかが課題です。センターのことに関連して3つお話しします。

まず一方で、センターは東アジアの日本研究者が集っています。他方で、日本国籍を持って中国、韓国、アジアを研究する研究者、さらに文学や歴史など様々な分野の研究者も日本の学会には多数います。しかし、この両者の間に、どこまでの交流があるのでしょうか。すれ違いがたくさんあるのです。センターはその間のプラットフォームを作らなければならないのです。つまり、日本の学会に外からの知識や経験、解釈を持ちこむ、逆に列島の中に閉ざされている情報を非日本語の世界に広げて行くことを、センターはその任務として行ってきました。それが設立の意図でもあったのです。しかし、それにはわれわれは成功していません。これをどうして行くかが一つの課題です。

二つ目は、作業言語の問題です。北米のAASに行けば、作業言語は英語です。英語は日本とも中国とも韓国とも、ある程度距離の隔たった言語です。一方で、日本学なり日本研究なりの会議をやった時の作業言語をどうするか。先ほど朴先生から、日本研究のコンソーシアムを作るときに、まず作業言語としての日本語があって良いのではないか、という提案がありましたが、私は「あくまでも作業言語で」と言う限りで賛同します。そこで使われる日本語は支配・被支配という関係ではなく、あくまでも我々が議論するにあたっての当座の道具だと割り切る必要がある。

三点目として、日本語の学会で当然と思われる語義や解釈を、鵜呑みにせず、疑問に付すためにあえて日本語という媒体を使う、という前提を意思的に持っておくべきだろうと思います。先ほど劉建輝先生が、日本の学会を知らない

人を呼んできてどしどし発言させれば良い、と言っておられたとおり、日本の学会で通じていると信じ込まれている言葉遣いが通じない場を設定していくことが、日本学を外に開く意味でも大切なのではないのでしょうか。

さらに、欧米から来る研究者と東アジアの研究者とが同じ土俵で話し合うことは極めて難しい。未だに、それは上手く行っておりません。これを乗り越える方法は、皆さんと一緒に考えて行きたいと思います。

劉建輝 稲賀先生から、問題の核心をズバリと突くご意見をいただいたのですが、私から若干の補足をします。

確かに国際日本文化研究センターは、大きな成功はしていませんが、大きな失敗もしていないのです。少なくともインフラ作りに関しては、そこそこやってきたつもりです。つまりセンターは再来年で30周年を迎えますが、年間15本の共同研究を行い、年間数百人の外国人研究者が日文研に集い、日本人研究者と議論します。こうして作られてきた人的なインフラが、ここでも役に立つと思います。

特に顕著な例としては、最近、日文研では「帝国」という大きな枠組みで戦前をとらえる共同研究が増えてきました。先ほど、南先生から「なぜ、日本研究が突破口になるのか？」というお話がありましたが、私はそれなりの歴史的経緯があるからできること、つまり日本は率先して近代化を果たし、その中でも知的な

